

# ひょうご 水百景

## No.23 船場川（姫路市）

～池田輝政が描いた姫路城の防御線・三重の螺旋濠～



写真-1 市之橋から船場川および内濠を撮影（平成25年4月）

### ■ 池田輝政、要衝の地・姫路に入封

平成5（1993）年12月にわが国初の世界文化遺産となった国宝『姫路城』、その西の市街地を南北に流れる船場川の歴史は古く、慶長6（1601）年池田三左衛門輝政の城下町建設までさかのぼります。

慶長5（1600）年9月15日、関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は、その1ヶ月後に論功行賞を行い、関東を中心に近畿・中部・北陸・東南北部を親藩・譜代の大名で固め、その外に外様大名を配しました。そして、外様との間に直轄領を置き、同時に親藩・譜代と外様との境界領域には、徳川にとって最も信頼のおける有力大名を配置するという構図を描きました。



写真-2 姫路城大天守（平成29年4月撮影）

この構図の下に、境界領域である姫路に封じられたのが、関ヶ原の戦いで抜群の功績をあげ、家康の二女・督（とく）姫と再婚した池田輝政です。姫路は、中国・九州勢の東上を阻止するとともに、大坂の豊臣勢への牽制もできるという、徳川にとって両にらみできる要衝の地であり、しかも地域全体が豊かな生産力を持ち、秀吉が天下取りの拠点にした城でもあります。輝政の姫路入りは、家康が最重要視した人事でもあったわけです。

### ■ 輝政の築城、洪水のたびに氾濫し流路が変わる市川を防御線に

慶長5（1993）年12月、輝政37歳の時に姫路に入封、翌年から姫山での築城と城下町の建設に着手します。西国大名を監視・威圧する徳川幕府の巨大な軍事拠点としての築城です。四方から攻められやすく防御面で不利な姫山での築城に踏み切ったのは、姫山周辺を流れる川を濠（ほり）に利用することで、地形上の不利を補うことができると考

えたからといわれています。では、当時の姫山周辺の地形はどうだったのでしょうか。市川は洪水のたびに氾濫し、そのたびに流路が変わり多くの派川が流れていました。姫山はその市川の氾濫原にありました。

右の図-1 は、田中眞吾先生が航空写真(昭和23年に米軍が撮影したもの)を解析して、微高地、微凹地を書き入れて旧川筋を推定したものです。この図から、“暴れ川・市川”の様子をうかがい知ることができます。

当時の市川の本流は、保城(ほうし)の小字横手から南西方向に分岐した流れで、野里付近で二股に分かれる「二股川」でした。姫山周辺はこの二股に分かれた川に挟まれた地にあり、県立歴史博物館の北にある「河間町(こはさまちょう)」という地名はこれに由来しています。

このように、防御面に加え水害に対しても脆弱な地に輝政は大規模な城下町を造ろうとします。

輝政の意を受け、縄張りを打ったのは伊木長門守忠繁<sup>※1</sup>(いぎながとのかみただしげ)、複雑で大スケールの石垣工事には最先端技術を有する穴太衆<sup>※2</sup>(あのをしゅう)の堀金一族が当たりました。このように、普請(土木)と作事(建築)が当代一流の技術者集団によって進められました。

**※1 伊木長門守忠繁**：姫路藩池田家筆頭家老。伊木家第2代当主。姫路城の大改修の際には普請奉行の役目を担っている。慶長8(1603)年、父が死去したため23歳で家督を相続する。三木城主となり4千石を弟の幸雄に分与し3万3千石を領する。

**※2 穴太衆**：織豊時代(安土桃山時代)に活躍した石工の集団。主に寺院や城郭などの石垣施工を行った技術者集団である。近江の比叡山山麓にある穴太(現・滋賀県大津市坂本穴太。延暦寺と日吉大社の門前町・坂本の近郊)の出身で、古墳築造などを行っていた石工の末裔であるという。寺院の石工を任されていたが、高い技術を買われて、安土城の石垣を施工したことで、織田信長や豊臣秀吉らによって城郭の石垣構築にも携わるようになった。それ以降は江戸時代初頭に到るまでに多くの城の石垣が穴太衆の指揮のもとで築かれた。

## ■ 市川の本流を現在の流路に切り替え、派川は内濠・中濠・外濠・農業用水路に利用

まず市川の本流を現在の流路に切り替える<sup>※3</sup>ために、大日(高木付近のS字状の水衝部)の堤防を補強あるいは新設する工事を行いました。この工事により、地名にも残っている「小川」が本流となり、一方、旧本流の二股川は西の流れ(現・船場川)を派川として残し、その他の派川は農業用水路として新田を開くとともに、流路の一部を屈曲させるなどして城の内濠・中濠・外濠として利用しました。

輝政は、こうして城下への洪水流入を防止する対策を講じた上で、城郭・まちづくりに着手します。慶長10(1605)年頃に内濠・中濠・外濠と各曲輪<sup>※4</sup>(くるわ)が概成、“三重の螺旋濠”を有する天下の名城が竣工したのは慶長14(1609)年10月、実に8年の歳月を要しました。

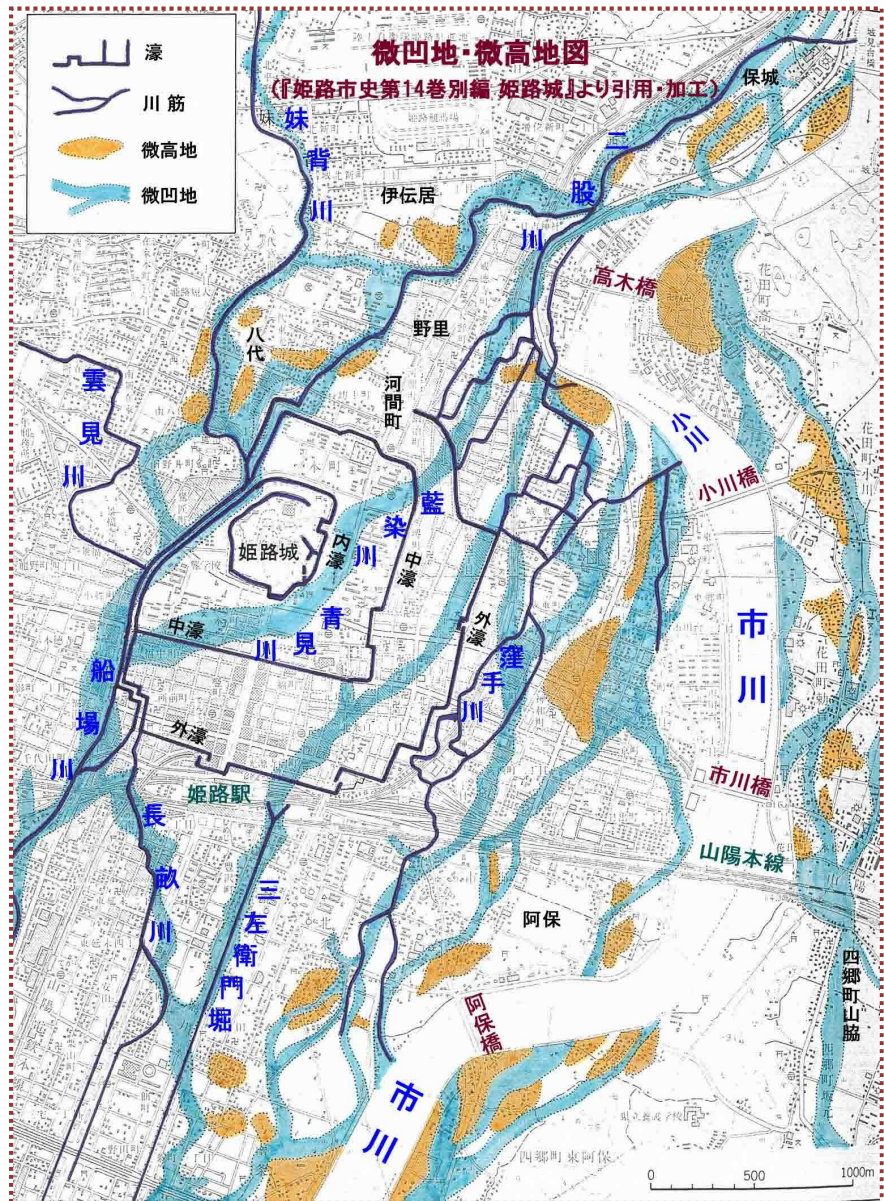


図-1 姫路城周辺の微高地・微凹地図

輝政は、姫路入りして 12 年余り後の慶長 18 (1613) 年 1 月 25 日、持病の中風が再発し 50 歳の波乱の生涯を閉じました。

夢半ばにしてこの世を去った輝政の後継は、前妻との間に生まれた利隆でしたが、大坂夏の陣後の元和 2 (1616) 年 6 月に 33 歳で亡くなり、その跡を利隆の長男・光政が継ぎます。幼少よりその才知を期待され、5 歳で家康に謁した時、天下の大御所に「眼光の凄まじさ、只者ではない」と言われ大きな期待がかけられた光政でしたが、7 歳の幼少であったため要衝の地・姫路を任せるわけにはいかず(ダジャレか?)、翌元和 3 (1617) 年 6 月、因幡国鳥取 32 万 5 千石に移封となります。入れ替わりに 7 月本多忠政が伊勢国桑名から入封します。

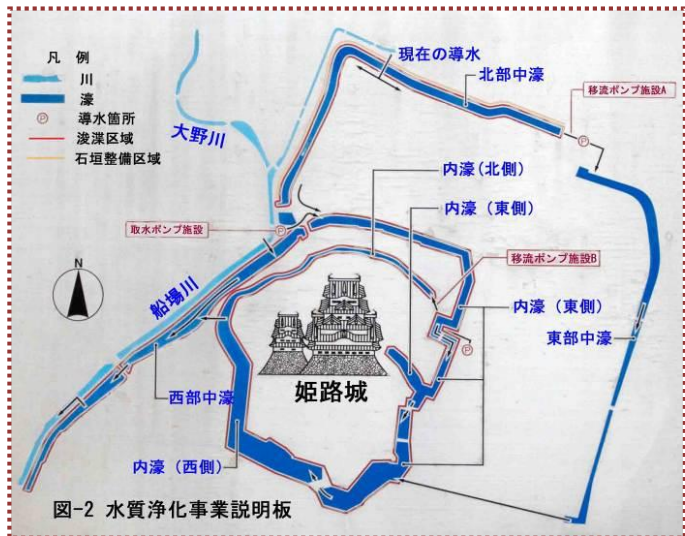


図-2 水質浄化事業説明板

なお、鳥取藩主となった光政ですが、因幡国は生産力も年貢収納量もかなり低く、加えて 10 万石減封されたのに姫路時代の 42 万石の家臣を抱えていたため、藩の財政は苦しかったそうです。鳥取移封から 15 年が経った寛永 9 (1632) 年 4 月 3 日、叔父の岡山藩主・池田忠雄(ただかつ)が死去し、従弟で忠雄の嫡男・光仲が 3 歳の幼少だったため、山陽道の要所である岡山は治め難いとして、6 月に光政は備前岡山 31 万 5 千石へ移封となり、光仲が鳥取 32 万 5 千石に国替えとなります。以後「西国將軍」と呼ばれた池田輝政の嫡孫である光政の家系が明治まで岡山藩を治めています。

光政は、寛永 18 (1641) 年、全国初の藩校・花鳥教場を開校し、寛文 10 (1670) 年には日本最古の庶民の学校として閑谷(しずたに)学校(備前市:写真-3)も開いています。教育の充実と質素倹約を旨とし「備前風」といわれる政治姿勢を確立しました。岡山郡代官・津田永忠を登用し、干拓などの新田開発、百間川(旭川放水路)の開削などの治水も行っています。このため光政は水戸藩主・徳川光圀、会津藩主・保科正之と並び、江戸時代初期の三名君と称され、備前池田家中興の祖といわれています。



写真-3 閑谷学校

※3 流路を切り替える: いわゆる「市川付け替え説」について、一説に輝政は市川を東に付け替える大工事を行ったとされていたが、『姫路市史』第 14 巻によると、「輝政時代の工事は本流の付け替えではなく、洪水時に水が城下町とその東縁の地帯に氾濫しないように堤を補強し、安定した城域を造ること、そのために現在の市川筋に流路を固定する工事を行ったということではなかろうか。…(中略)…市川付け替え説はここで否定修正されるべきであろう」と記されている。

※4 曲輪: 城郭内にある一定区画を分かつ区域である。郭(くるわ)とも書く。曲輪は、防御陣地・建造物を建てる敷地・兵の駐屯施設として、城郭の最重要施設である。江戸時代には中心的な曲輪に、本丸・二の丸・三の丸などの名前が付く。

## ■ 濠の水はどこから?

三重の防御線をもつ姫路城は、結局一度も戦いの場となることなく江戸時代は終わります。明治以降、都市の近代化に伴い濠の役割は薄れ、交通の支障になることも。

大正時代になって南部の外濠は姫路駅前商店街の拡張により、また南部の中濠も昭和 7 (1932) 年に国道 2 号(現・東行一方通行)を通すため埋め立てられています。

船場川に架かる白鷺橋(はくろばし)の東に石碑(写真-4)があり、そこには「昭和七年三月国道貳号線改修ノタメニ城濠東西凡ソ四百五拾米ヲ埋メテ道路トナス 依テ別二境石ヲ置キ其ノ城濠タリシコトヲ示ス」と刻まれています。

現在、埋立により中濠は寸断された状態ですが、濠の水は船場川の坊主橋直下にある取水樋門(写真-5)から北部中濠に取り入れられ(写真-6)、3ヶ所に設置された移流ポンプによって循環させています。その流れを示すパネル(図-2)が、清水門付近の船場川右岸部にある「水質浄化事業の竣工記念碑」に埋め込まれています。

なお、中濠に取り入れられた水はゆっくりと濠を巡り、約 5 日後に西部中濠から再び船場川に戻されているそうです。



写真-4 白鷺橋東の石碑



写真-5 坊主橋と取水樋門



写真-6 取水樋門の吐口部（北部中瀬）



写真-7 内瀬から姫路城を望む

### ■ 中村重遠大佐、歴史的・文化的価値の高い姫路城を破却・売却の危機から救う

明治維新になって全国にあった封建制度の象徴というべき城は、陸軍が兵営地や訓練場所としての価値を認めた全国 43 城以外は、明治 6 (1873) 年の「廃城令」によりすべて破却されました。姫路城は幸いにもその 43 城の中に入り城は残ることになりましたが、それは姫路城の敷地が陸軍師団の駐屯地として好適地だったから、という理由だけのことで、今日のように城の歴史的・文化的価値を認めるなどという発想はまだありませんでした。そのため城は荒れ放題で、明治 11 (1878) 年頃には姫路城も取り壊しや売却の危機に陥ってしまいました。

このとき、陸軍の建築・修繕を担当する部局の局長代理だった高知県宿毛出身の中村重遠(げとお)大佐は、全国の城を視察する中で、特に姫路城と名古屋城の文化的価値を認め、時の陸軍卿・山縣有朋に、この天下の 2 名城を後世に残すよう太政官に上申してもらいたい、との意見書を提出します。

その結果、陸軍参謀本部がこの上申を認め応急の保存工事ができることとなります。そして、これが後の大規模な昭和の大修理、平成の大修理へと繋がっていくのです。

わが国初の世界文化遺産である「姫路城」が今日あるのは、まさに中村大佐のおかげといっても過言ではありません。

菱の門を入った左手に「中村大佐顕彰碑」(写真-8) が立っています。

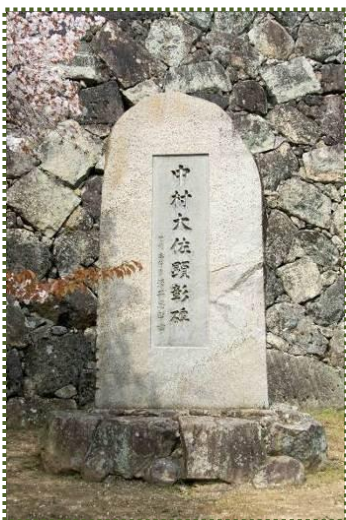


写真-8 中村大佐顕彰碑



図-3 姫路城周辺の地図

## ■ モノローグ

平成 26 (2014) 年の NHK 大河ドラマは、姫路から天下に翔けた智謀の将・黒田官兵衛孝高(よしとか)を主人公にした『軍師官兵衛』です。きっと大勢の観光客が姫路を訪れることでしょう。観光客を迎える姫路駅北の駅前広場の整備も、平成 25 (2013)年度末完成をめざして現在急ピッチで工事が進められています。そして、平成 27 (2015) 年 3 月には姫路城大天守保存修理工事が完成します。このように、姫路は観光の目玉が次々と出てきて、当分賑わいが続きそうです。

(平成 26 年 10 月時点の姫路駅前が写真-9 です)



写真-9 駅前広場の整備が終わった姫路駅(平成 26 年 10 月)

### ツワブキ(石路)

キク科ツワブキ属に属する常緑多年草。葉柄は食用になる。つやのある大きな葉を持っており、毎年秋から冬に、キクに似た黄色い花をまとめて咲かせる。そのため「石路の花(つわのはな)」は、日本では初冬(立冬から大雪の前日頃まで)の季語となっている。島根県の津和野の地名は「石路の野(ツワの多く生えるところ)」が由来となっているという。日陰でもよく育ち、園芸植物として日本庭園の石組みや木の根元などに好まれる。民間薬(生薬名薬吾、たくご)として、茎と葉を打撲や火傷に用いる。有毒なピロリジジナルカロイドという物質を含んでいる。姫路市塩町の船場川左岸に生えていた。



写真-10 ツワブキ

### 【参考資料】

- 1 『播磨の地理・人文編～町と産業と交通路』 田中真吾編著 平成 5 年 4 月
- 2 『姫路市史 第十四巻 別編 姫路城』 姫路市 昭和 63 年 7 月
- 3 『姫路城～永遠の天守閣』 中元孝迪 平成 13 年 5 月
- 4 『船場川の流れ』 柳沢 忠 昭和 57 年 8 月
- 5 『伊木忠繁、穴太衆、池田光政、中村重遠、ツワブキ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成 25 (2013) 年 8 月 『ひょうご水百景』 No.23

改訂：令和 8 (2026) 年 4 月 『ひょうご水百景』 No.23